

千葉県印西市（旧印旛郡印旛村）戸ノ内貝塚 第7次発掘調査概報

高橋龍三郎・中門亮太・岩井聖吾・服部智至・平原信崇

はじめに

戸ノ内貝塚を調査し始めたのは今から8年前、2004年の春である。遺跡を載せる台地の地形測量から、順を追って発掘地点の選定と調査区の設定を行い、2004年の春季休暇に第1回目の発掘調査を実施した。以来、7年の年月を費やして、毎夏に合宿をしながら発掘調査を継続してきた。昨年、発掘調査に関して一通りの計画を完了した。

本調査は、「縄文時代後・晩期社会の解明」という学術的な課題を設定している。したがって発掘調査の方法も課題究明に向けて具体的計画を練り、段取りを整えることが重要であった。今後の整理作業を進める場合でも重要な指針である。

今までの調査で、壁柱穴をもつ大型住居1棟と多数の土坑を検出した。遺跡の性格を見極めるために、遺構の時期的な配列と変遷を明らかにして、遺物研究からの成果を援用しつつ、遺跡形成の歴史を再構築する必要がある。今回の発掘調査は面積が36㎡という小規模の調査であったが、前回の調査で検出した土坑群を完掘することを目的にするものであった。今までの成果の梗概をまとめると、後期の土坑を中心とする遺構が多数造られ、その終わりから晩期初頭にかけて大型住居が構築される形成史を読み取ることができる。今回報告する土坑群は、後期社会を論じるうえで重要な資料である。一回性の遺構でなく、何度も繰り返して掘っては埋めるといった所作が多く事例で観察された。どのような文化・社会的脈絡に関連する行為なのかはまだ解明されていないが、今回の調査はまさに限られた面積の中でそれを読み解くことを目的としていた。印旛沼周辺の遺跡でも同種の土坑は多数発見されているので、本遺跡の土坑もそれらに新たな一例を加えたことになる。

土坑をはじめ遺構の性格を正しく把握するために、発掘中に多くの土壌をサンプリングした。これに関して株式会社パレオ・ラボの佐々木由香氏から自然科学分析の研究結果を提出いただいたので、併せて掲載する。

これらの細かな事例の集成と分析・検討によって、印旛沼周辺地域を中心に発達した縄文後・晩期社会の実態は解明されるに違いない。発掘調査に関して、これが最後の報告となる。

（高橋龍三郎）

1. 調査組織

本次調査の概要および調査組織は以下のとおりである。なお、役職や学年等は調査当時のものである。

調査名称：戸ノ内貝塚第7次発掘調査

遺跡所在地：千葉県印西市師戸字戸ノ内66番（旧印旛郡印旛村）

調査主体：早稲田大学文学部考古学研究室

調査期間：2010年9月3日～9月12日（9月6日を除く）

調査の種類：学術調査

調査面積：36㎡

調査担当：高橋龍三郎（教授）・寺崎秀一郎（教授）

調査指導：岡内三眞（教授）・近藤二郎（教授）・長崎潤一（教授）・山形真理子（非常勤講師）

調査協力：能勢幸枝（印西市教育委員会）・印西市教育委員会・千葉県教育庁教育振興部文化財課・千葉県教育委員会

調査主任：宮里修（助教）

調査参加者：川畑隼人・中門亮太・大網信良・青木弘・新海達也・石井彩子・鈴木朋美・深山絵実梨・岩井聖吾・服部智至・平原信崇（以上大学院生）・金殷暎（研究生）・青木奈々子・秋山加奈子・伊藤航太・今城未知・宇佐美諒・梅村直樹・岡崎弥咲・小野英一・小野享祐・加藤育磨・河合愛佑美・川元航洋・神崎聡史・北畠佑亮・熊前徹・後藤里英・佐々木穂波・佐々木未来・佐藤農・重田鉄郎・高野智史・高橋晶子・遅越直也・中島涼輔・姫野祥平・福村澄・福山桃子・藤津一平・船橋岬・山川彩（以上学部2年生）・小島信太郎（國學院大学）

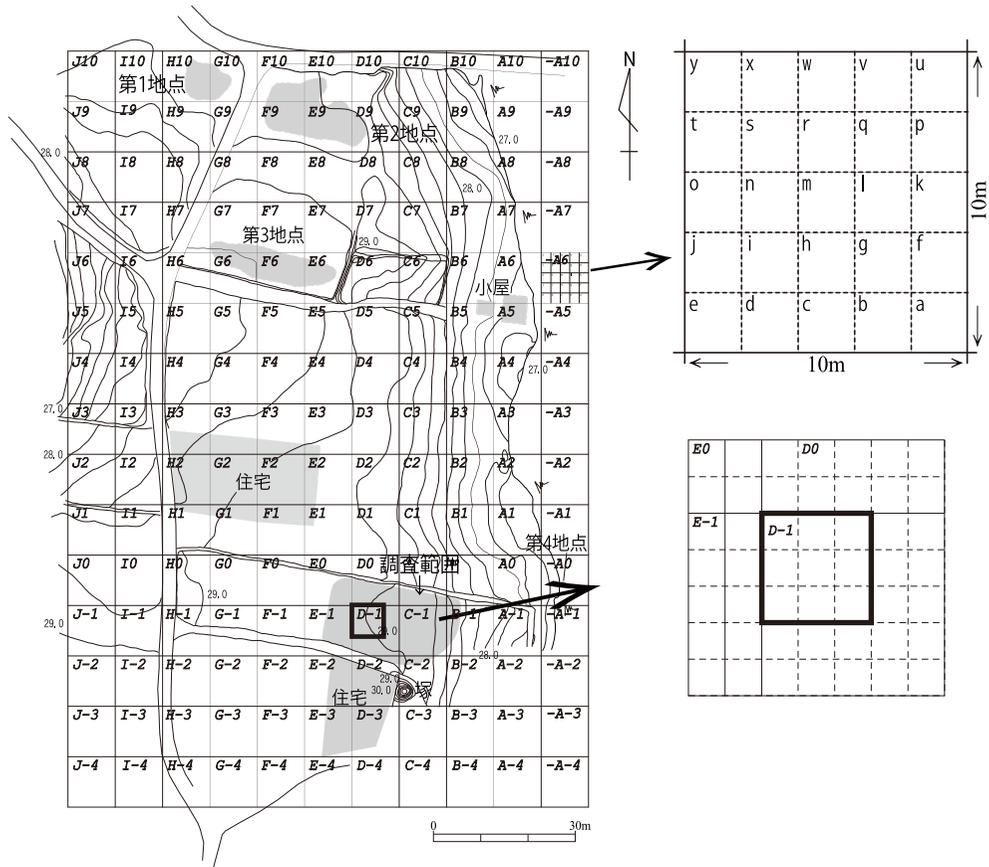
なお、本稿をまとめるにあたり、上記参加者以外に熊崎真司・小原俊行・水本朋菜（以上大学院生）・ナワビ アハマッド 矢麻・鈴木裕里・明石千鶴・伊東真佑子・大里和也・太田英伶奈・大塚季理亜・篠原唯輔・鈴木真理奈・豊田恭章・中尾穂奈美・福島浩子・水野由貴・山崎太郎・渡邊玲（以上学部生）が整理作業に参加した。（中門亮太）

2. 調査の経過と方法

本発掘調査は、文学部考古学コースの正課授業である考古学演習（実習）の夏季野外調査である。早稲田大学考古学研究室では、2003年度の測量調査（0次調査）以降、8か年にわたり継続して戸ノ内貝塚の調査を実施してきた。第7次調査は、これまでの調査で掘削しきれなかった遺構の発掘を行い、調査区内における発掘調査の完了を目指した。調査範囲及びグリッド配置は第1図を参照されたい。

発掘調査は、学部2年生を9月3日～5日、7日～9日、10日～12日の3班に分け、大学院生がこれを補佐する形で行った。まず発掘調査区の基準点およびグリッドの設定、発掘調査に先立つ庶務（テント・簡易トイレ等の設置、近隣住民への挨拶）を行った。これと並行して、順次発掘区内の草刈りや埋め戻し土の除去等を進め、第6次調査時の図面を参照しつつ遺構確認を行い、本格的な調査を開始した。9月11日には調査区内における発掘が終了し、戸ノ内貝塚における発掘調査は本次調査をもって完了となった。12日には、山砂を敷き詰めた後に、人力による調査区の埋戻しを行い、第7次調査を終了した。

記録はこれまでと同様に、簡易遣り方測量と気泡管レベルを用いた遺構図面作成、およびトータルステーションと電子平板（使用ソフト「Guider IV」）を用いた遺物の取り上げを中心としている。

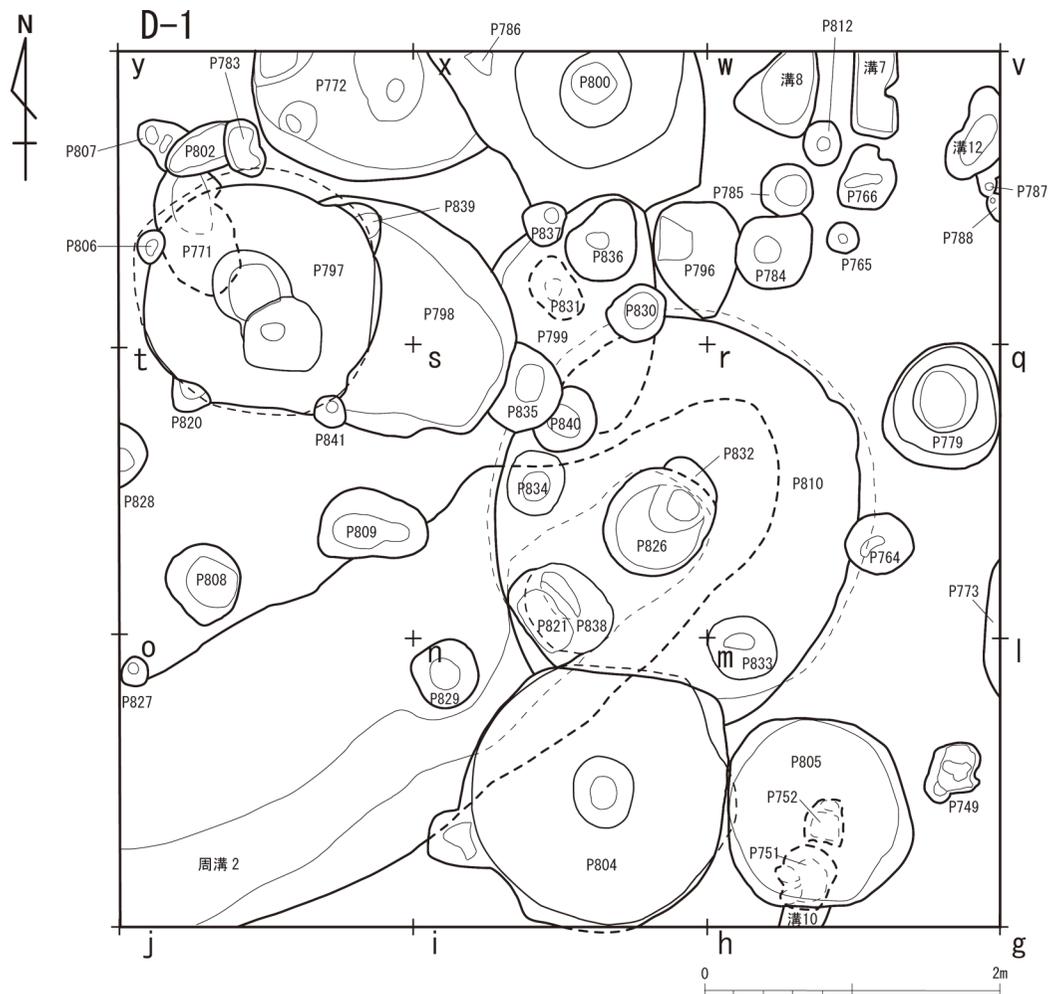


第1図 戸ノ内貝塚周辺地形図および第7次調査区

発掘調査では、遺物の遺構間接合等の把握を念頭に、極力すべての出土遺物の出土位置を記録することに努めた。写真撮影では、モノクロとリバーサルの35mmフィルムカメラと、デジタルカメラを用いて記録した。なお、例年は近隣住民を対象とした現場説明会を開催していたが、今年度は発掘面積が小規模であること、昨年度調査の追補調査であることなどの事情から実施せず、随時、見学や訪問に対応をした。(中門亮太)

3. 検出された遺構と出土遺物

本次調査では、縄文時代の土坑12基を検出した。発掘調査は前年度調査で確認した土坑と今年度新たに検出した土坑の調査を並行して行った。以下に、その中でも特筆すべき遺構の概要を述べる。なお、遺構出土遺物の観察表は章末に付した。



第2図 戸ノ内貝塚第7次調査 調査区全体図

P797（第3～6図・写真2～4）

位置：調査区北西、D-1y・tグリッドに位置する。

検出状況：東側でP798を切り込み、西側でP771に切り込まれる。第6次調査で検出し東西にセクションを設定して掘削を始めたが、半截を終え掘り下げを進めていたところ、確認面から82cmの地点で後期安行1式期の略完形深鉢形土器が出土した（第5図1）。第6次調査では調査日数の都合から、その土器を取り上げた後にブルーシートで養生して埋戻しを行い、本次調査で継続して掘削を行った。第6次調査時に、底面にピットがあることを確認しており、規模や形態、遺物の出土状況も、これまで戸ノ内貝塚で検出してきた大型土坑とよく似た特徴を有している。調査区内における大型土坑は、このP797を残すのみであったため、より入念な調査をすべく新たに南北にセクションを設定し、北東部を半截する形で掘削を進めた。覆土は可能な限り層位ごとに回収し、現在ウォーターフローテーションによる分析を継続中である。

規模と形態：平面形態は径約160cmの略円形を呈し、確認面からの深さは102cmを測る。底面が若干オーバーハングするが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面中央に、2基の掘り込みが北西―南東軸で重複している。南側が北側を壊して構築されており、北側は推定長径58cm、深さ37cmの楕円形、南側は径約51cm、深さ41cmの略円形を呈する。また、北東・北西・南西・南東の四隅に深さ約40～50cmの土坑が存在する。

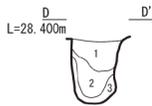
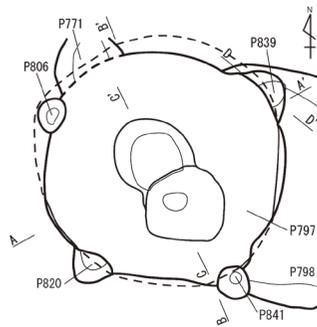
覆土の堆積状況：覆土は東西軸上で14層に分層したが、新たに設定した南北軸上で東西軸上では確認できなかった4つの層が確認されたため、1'～4'層として扱った。12層から14層および1'層～4'層は、廃絶時の自然堆積土層と思われる。その上の層は、1層～6層と7層～11層に大きく分かれるようである。本次調査では、確認面から97cmの地点で、6層中から安行1式深鉢形土器の大型破片が出土した（第5図2）。大型破片は口縁部を北東に向けた横位の状態で置かれており、第6次調査で出土した深鉢形土器の出土状況と近似している（第5図1）。6層は、7層をやや掘り込んで堆積している状況が確認でき、意図的に二次掘削を行って土器を埋設した可能性が考えられる。

底部掘り込みの覆土は、北側を4層、南側を3層に分層した。掘り込みの上方では、炭化物や焼土、骨片が比較的多く含まれるが、面的な広がりには確認できなかった。底面付近はロームブロックを多く含有している。四隅に位置するP806・P820・P839・P841は、P839のみ3層に分層した。いずれも確認面から40cmほどの深さで、規模・形態が近似していることから、上屋構造の柱穴の可能性も考えられるが詳細は不明である。

出土遺物：3層から5層にまたがる形で第5図1が、6層中8層直上から第5図2が、いずれも口縁部を北東に向けた横位の状態で出土している。そのほかにも整理作業で接合した大型破片を含め、土器片や炭化物、石等302点をドット上げで取り上げている。土器片は縄文時代中期後葉加曾利E式が少量見られるが、後期安行式が中心で、特に安行1式期のものが主体を占める。

帰属時期：出土遺物から、縄文時代後期後葉安行1式期に帰属する。

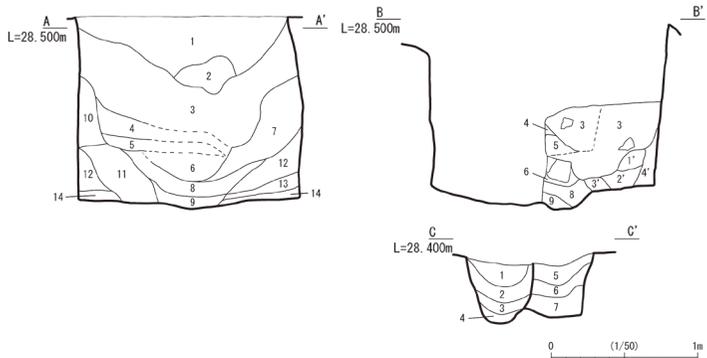
（中門亮太）



P839

1. 10YR3/2 黒褐色(しまりやや強、粘性弱、中ローム粒を中量・小～中ロームブロックを少量・極小焼土粒を微量含有)
2. 10YR3/2 黒褐色(しまりやや強、粘性弱、小ローム粒を少量含有)
3. 10YR4/4 褐色(しまり強、粘性やや強、ローム主体)

(土層説明凡例)
 ・しまり・粘性は、弱一やや弱一中一やや強一強、の5段階で示す。
 ・含有物は、『新版標準土色帖』に従い、粒状構造は、極小一小一
 中一大一特大、塊状構造は、極小一小一中一大、にそれぞれ分類
 した。また、含有割合についても同様に『新版標準土色帖』を
 使用したが、便宜的に1-2%を微量量、3-5%を少量、7-10%を少量、
 15-20-25%を中量、30-40-50%を多量と分類して適用している。



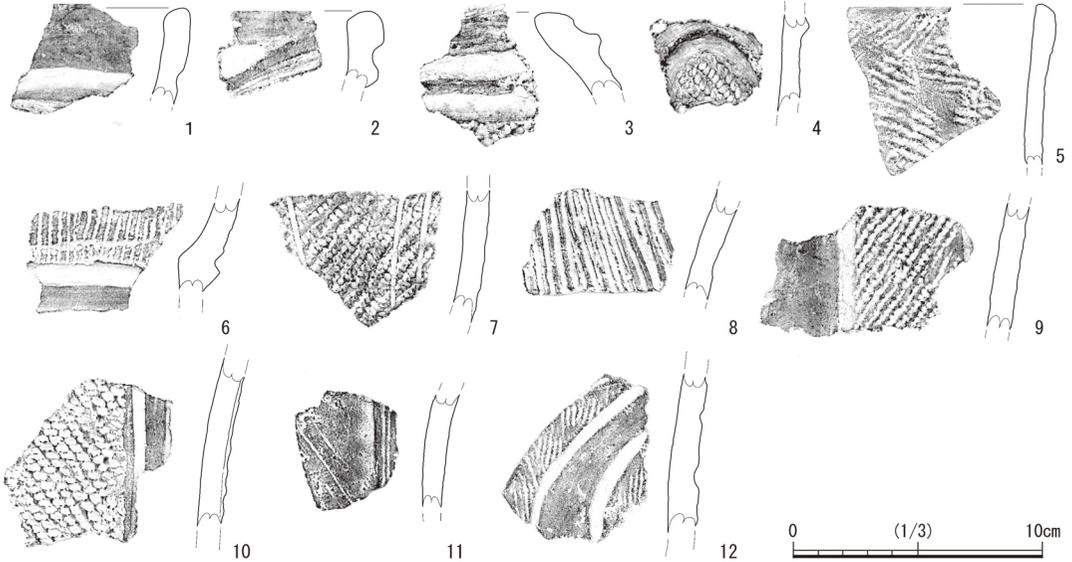
P797

- | | | |
|----------|---------------------|--------------------------------------------------------|
| 1(w1). | 10YR3/4 暗褐色 | (しまりやや強、粘性弱、小ローム粒15%、中ロームブロックを極微量・極小焼土粒を極微量・炭化物を極微量含有) |
| 2(w2). | 7.5YR3/2 黒褐色 | (しまりやや強、粘性弱、小ローム粒15%、中ロームブロックを極微量・炭化物を極微量含有) |
| 3(w3). | 7.5YR3/4 暗褐色 | (しまりやや強、粘性弱、大ロームブロックを少量含有) |
| 4(w4). | 10YR4/2 灰黄褐色 | (しまりやや強、粘性やや強、小ロームブロックを少量・中炭化物を少量・小焼土物を微量含有) |
| 5(w5). | 10YR3/3 暗褐色 | (しまりやや強、粘性やや弱、小ロームブロックを少量・小炭化物を微量含有) |
| 6(w6). | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | (しまり弱、粘性弱、中ロームブロックを少量・中炭化物を中量・極小焼土粒を微量含有) |
| 7(w7). | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | (しまり弱、粘性弱、小～中ロームブロックを少量・小炭化物を微量・小焼土粒を微量含有) |
| 8(w8). | 10YR3/3 暗褐色 | (しまりやや強、粘性やや強、小ロームブロックを少量・小炭化物を微量・小焼土粒を微量含有) |
| 9(w9). | 10YR4/2 灰黄褐色 | (しまりやや強、粘性やや強、小～中ロームブロックを少量・小炭化物を微量・極小焼土粒を微量含有) |
| 10(w10). | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | (しまりあり・粘性ややあり、小ロームブロックを少量・小炭化物を少量含有) |
| 11(w11). | 10YR4/3 やや明るいにぶい黄褐色 | (しまりやや強、粘性やや強、中ロームブロックを多量・小炭化物を少量・小焼土粒を微量含有) |
| 12(w12). | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | (しまりやや強、粘性やや強、中ロームブロックを少量・小炭化物を微量・極小焼土粒を微量含有) |
| 13(w13). | 10YR3/3 暗褐色 | (しまりやや強、粘性やや強、小ロームブロックを少量) |
| 14(w14). | 2.5Y4/2 暗灰黄色 | (しまり強、粘性粘土質、極小ロームブロックを微量含有) |
- 1' (n1). 10YR3/3 暗褐色 (しまり弱、粘性強)
 2' (n2). 10YR4/1 補灰黄色 (しまり弱、粘性強、小～中炭化物粒を中量・焼土を含有)
 3' (n3). 10YR4/2 灰黄褐色 (しまりやや強、粘性強、小ロームブロックを少量含有)
 4' (n4). 10YR4/3 にぶい黄褐色(しまり弱、粘性やや強、小ロームブロックを中量含有、下部にロームブロックが集中)

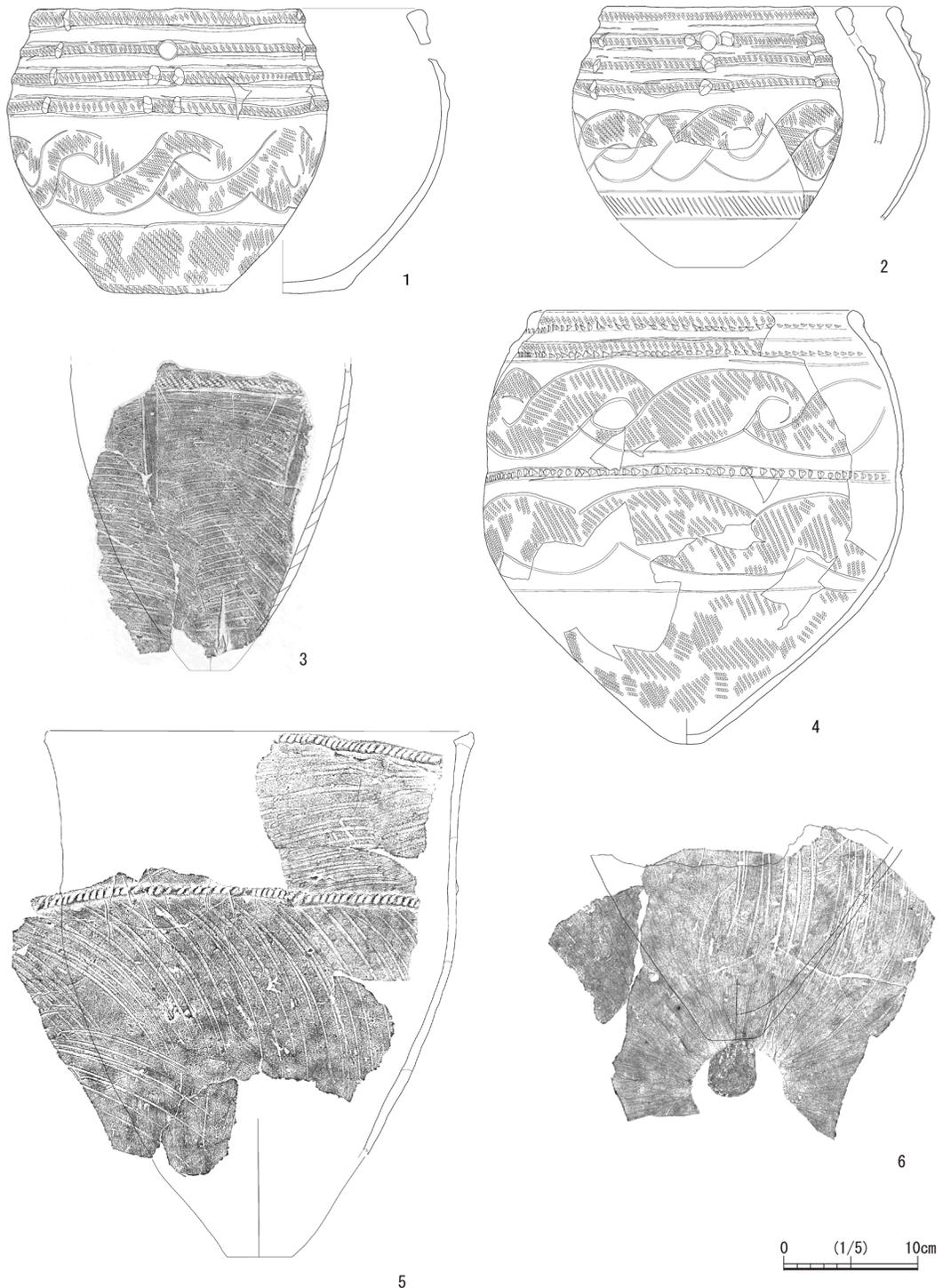
P797底面ビット

- | | | |
|----|---------------|--------------------------------------------------------|
| 1. | 10YR4/2 灰黄褐色 | (しまりやや強、粘性強、中～大ロームブロックを多量・中～大炭化物粒を多量・中焼土粒を中量・中骨片を中量含有) |
| 2. | 10YR3/2 黒褐色 | (しまり弱、粘性強、大ロームブロックを少量含有) |
| 3. | 10YR4/2 灰黄褐色 | (しまり弱、粘性強、大ロームブロックを少量含有) |
| 4. | 10YR3/3 暗褐色 | (しまり弱、粘性強、大ロームブロックを中量含有) |
| 5. | 10YR4/3 にぶい褐色 | (しまりやや弱、粘性強、極小ロームブロックを中量・小炭化物粒を中量含有) |
| 6. | 10YR3/3 暗褐色 | (しまり弱、粘性強、極小ロームブロックを少量含有) |
| 7. | 10YR3/3 暗褐色 | (しまり弱、粘性強、極小～小ロームブロックを多量・小焼土粒を多量・小～中炭化物粒多量に含有) |

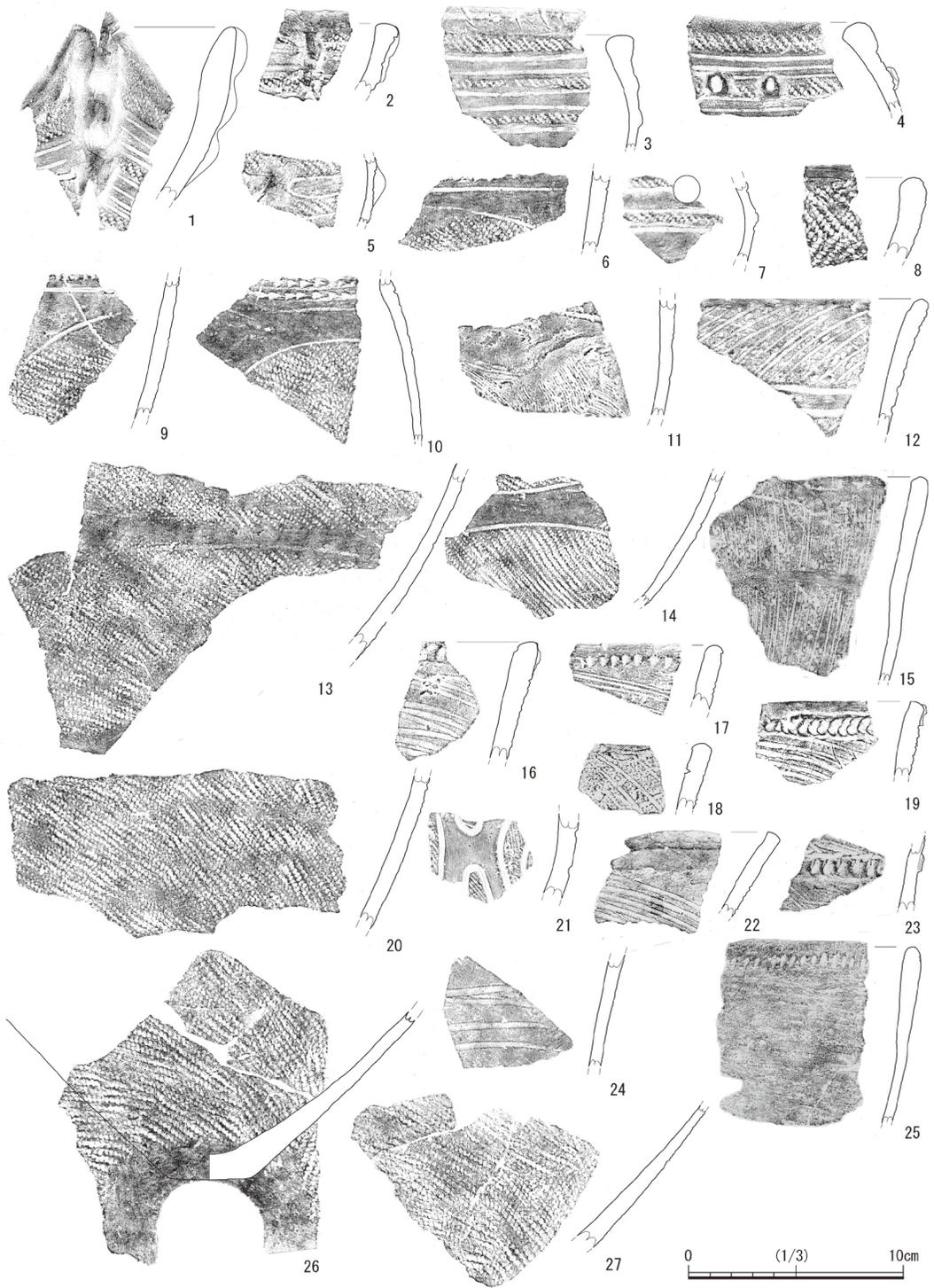
第3図 P797平面図・セクション図



第4図 P797出土土器(1)



第5図 P797出土土器 (2)



第6図 P797出土土器 (3)

P799（第7・8図、写真5）

位置：調査区中央北寄り、D-1x・sグリッドに位置する。

検出状況：北側でP800を、南東側でP810を切り込む。東側でP830に、南西側でP835・P840に切り込まれる。P831はP799を掘り込み、入れ子状に構築される。P799はP836・P837を破壊して構築される。本遺構は第6次調査において検出した。遺構検出時は単一の遺構と考えて掘削を行ったが、本次調査において複数の遺構が重複する可能性があったため、南北軸で設定したサブトレンチによる調査を行った。

規模と形態：平面形態は長径166cm、短径124cmの不整楕円形を呈する。確認面からP836・P837覆土上層までの深さは約48cmを測る。

覆土の堆積状況：覆土は6層に分層した。いずれも焼土ブロックと炭化物粒子を多く含む。また、底面の平面形態および覆土の差異からP836・P837を別遺構と判断した。P836は4層、P837は2層に分層した。P836・P837の覆土はP799の覆土と比較して焼土や炭化物の含有量が少なく、しまりが弱い。互いに切り合わないため新旧関係は不明だが、覆土の様相は類似する。

出土遺物：ドット上げ遺物の総数は31点である。縄文時代中期後葉加曽利E式、後期後葉安行1式に比定できるものが主体である。

帰属時期：出土遺物から、縄文時代後期後葉安行1式期に帰属する。（岩井聖吾）

P810（第7・9図、写真7）

位置：調査区中央東寄り、D-1x・w・s・r・n・mグリッドに位置する。

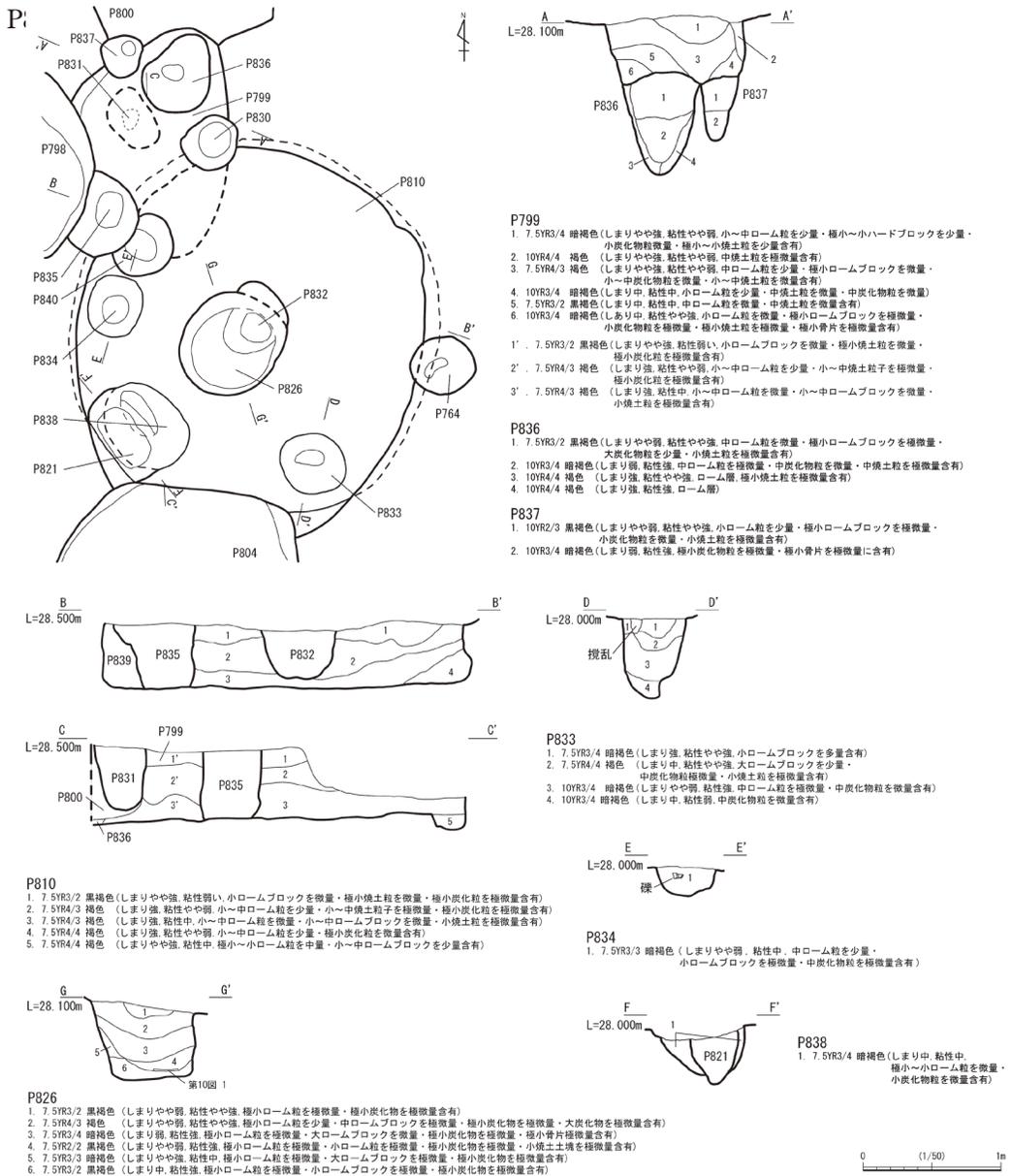
検出状況：北西部でP799・P830・P835・P840に、東部でP764に、西部で周溝2に、南部でP804に切り込まれる。南西部でP821が、中央部でP826・P832が入れ子状に構築される。また、P810底面においてP833・P834・P838を検出した。本遺構は第6次調査において検出した。遺構確認時では南部・北西部のプランを別遺構のP782としていたが、後に覆土の様相や平面形態から同一遺構と判断した。

規模と形態：平面形態は推定長径290cm、短径250cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは約58cmで、壁は南部の崩落部を除いてオーバーハングする。底面に径50cm、深さ40cmのP833、径66cm、深さ68cmのP838、径46cm、深さ23cmのP834を伴う。これらの小ピットは検出状況からP810に付属するものと考えられる。

覆土の堆積状況：覆土は3層に分層した。黒褐色土層の1層と褐色土層の2・3層に大きく二分できるが、2層と3層は類似するため混入物の差異に従って細分した。覆土は焼土粒子や炭化物を微量含むが、南東部底面付近において径5～10mmの炭化物の集中分布を確認した。覆土は水平～やや傾斜気味に堆積するため、埋戻し行為が単純または単発であったことが推定できる。また、1'～3'層は覆土の様相がP810に類似するが、平面分布からP799に帰属するものであると判断した。

出土遺物：ドット上げ遺物の総数は104点である。縄文時代早期後葉条痕文系、中期後葉加曽利E式・曾利式、後期後葉安行1式・安行2式、晩期初頭までの土器が出土しているが、主体は加曽利E式である。後期後葉に比定できる土器が一定量出土しているが、これらは重複するピットに帰属する可能性が高い。

帰属時期：出土遺物から、縄文時代中期後葉加曽利E式期に帰属する。(岩井聖吾)



第7図 P799・P810・P826平面図・セクション図

位置：調査区中央、D-1・s グリッドに位置する。

検出状況：P810の覆土を切り込んで構築され、北東側でP832に切り込まれる。

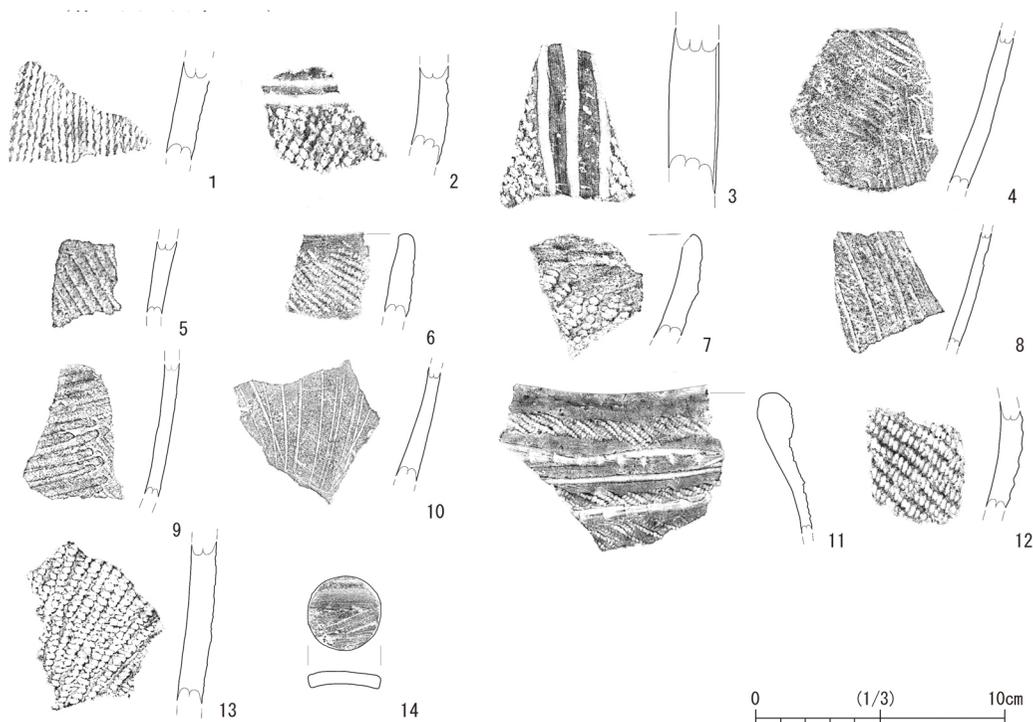
規模と形態：平面形態は、開口部と底部がともに略円形を呈し、開口部径64cm、底部径56cmを測る。確認面からの深さは、最も深い箇所60cmを測る。底部から開口部にかけて、南壁側はほぼ垂直に立ち上がり、北壁側はやや開きながら立ち上がる。

覆土の堆積状況：覆土は6層に分層した。大別すると、1層から4層までの上層、5層と6層の下層に分けられる。両者を比較すると、上層の覆土はしまりが弱く、含有物に炭化物や焼土、骨片が目立つ。一方、下層の覆土はしまりが強く、含有物にロームブロックが目立つ代わりに炭化物等は少ない。以上より、P826は2度掘り込まれていると観察し、上層は2度目の掘り込みに伴う覆土、下層は1度目の掘り込みに伴う覆土と解釈した。

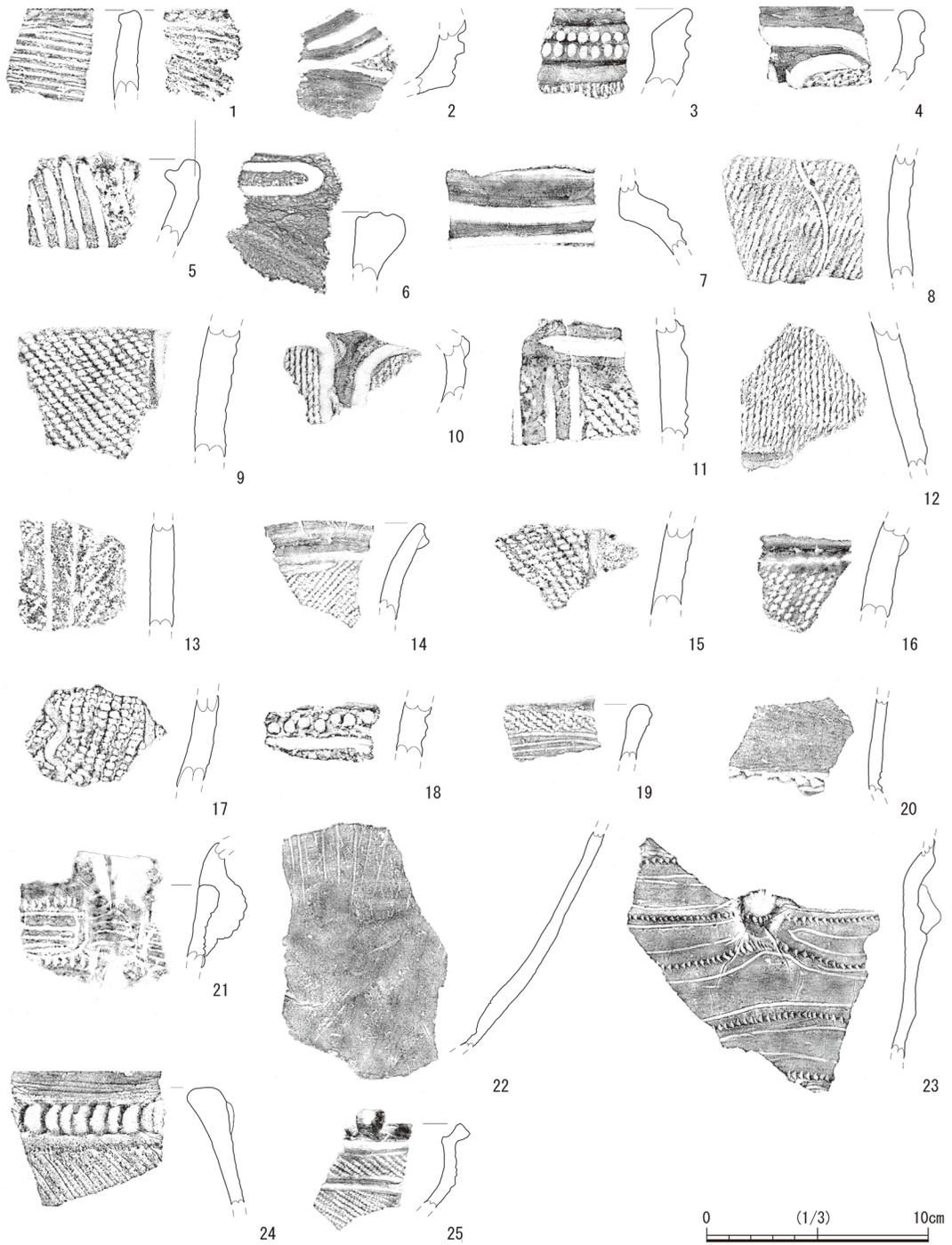
出土遺物：ドット上げ遺物の総数は34点である。ほかに、小片のため土坑一括として取り上げた土器がある。特筆すべきは、第10図1の出土状況である。1は4層の最下面から、横位の状態で外面を下に向けて出土した。覆土の堆積状況を併せて考えれば、2度目の掘り込みに伴い、何らかの意図のもとで埋置された可能性が高い。

帰属時期：出土遺物から、縄文時代後期後葉に帰属する。

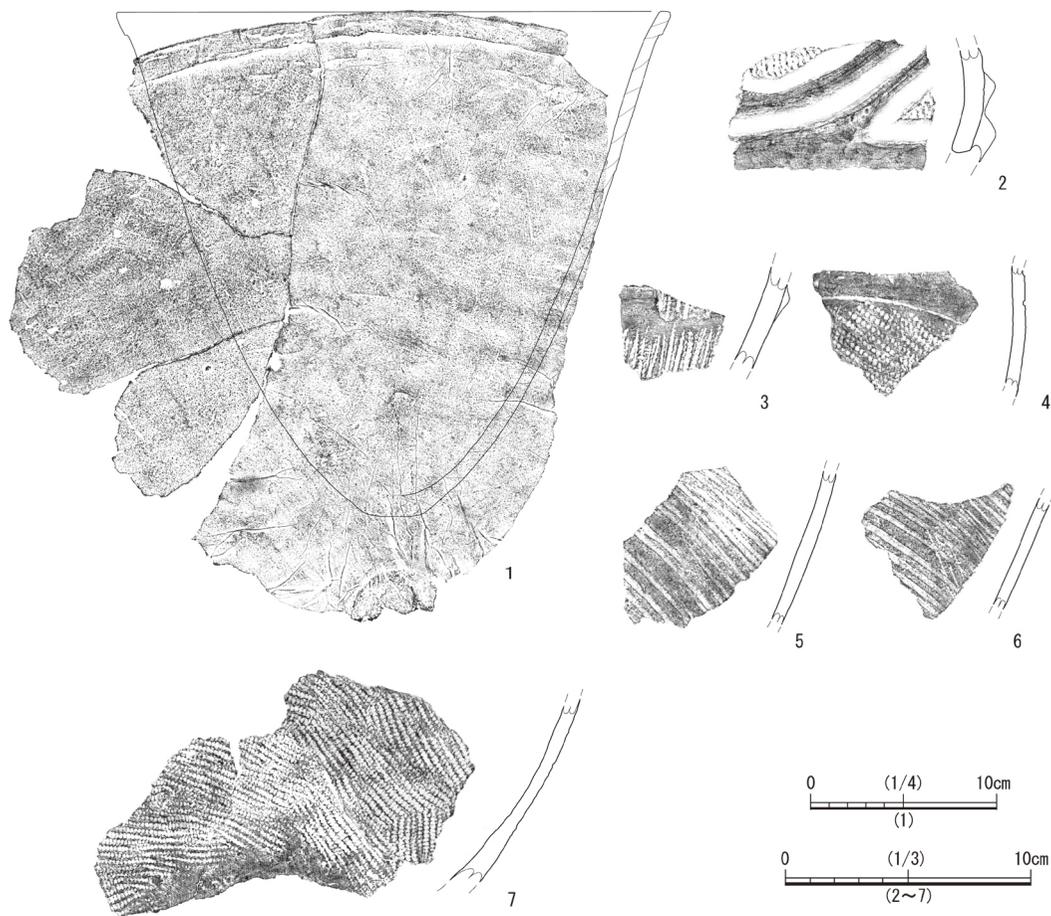
(平原信崇)



第8図 P799出土土器・土製円盤



第9图 P810出土土器



第10図 P826出土土器

位置：調査区中央西寄り、D-1・tグリッドに位置する。

検出状況：第6次調査時に検出し、本次調査で完掘した。他の遺構とは重複しない。

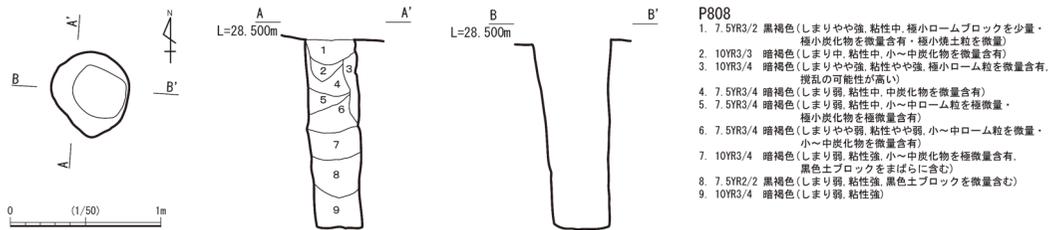
規模と形態：平面形態は径約52cmの略円形を呈する。確認面からの深さは124cmを測る。断面形態は円筒形を呈し、壁は底面からはほぼ垂直に立ち上がる。

覆土の堆積状況：覆土は9層に分層した。大別すると1層から6層までの上層、7層から9層までの下層に分けられる。両者を比較すると、上層の覆土は1～5mm程度の炭化物とローム粒が多く含有され、微量ではあるが次第に含有量が増加する。一方、下層の覆土はしまりが非常に弱く、粘性が非常に強い。下層の含有物は、7層中の黒色土ブロックが目立つのみで上層と比べ相対的に含有物が少ない。以上より、上層は有機物やローム粒を多く含む土が自然堆積したもの、下層は何らかの意図のもとで粘性の強い土が人為的に埋め戻されたものと考えられる。

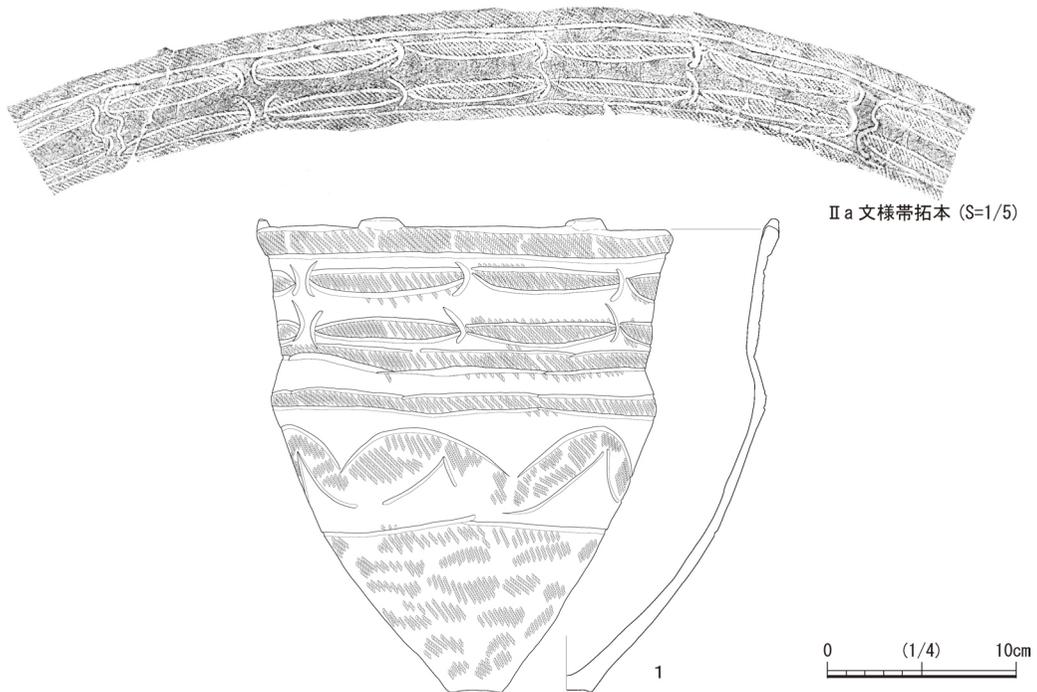
出土遺物：ドット上げ遺物の総数は6点である。内訳は土器4点、動物遺存体1点、植物遺存体1点である。確認面から約50cmの6層下部から、第12図1の略完形深鉢形土器が口縁部を南東に向けた横位の状態で出土した。第12図1の土器内土壌はリン・カルシウム分析および微細物分析に、土器外面付着炭化物については放射性炭素年代測定法を株式会社パレオ・ラボに依頼した。分析結果については付篇を参照されたい。

帰属時期：6層出土の略完形深鉢形土器から、縄文時代後期後葉～晩期初頭に帰属する。

(服部智至)



第11図 P808平面図・土層断面図・エレベーション図



第12図 P808出土土器

第1表 P797出土土器 観察表(1)

図版	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土 焼成	備考
第4図-1	中期後葉 加曾利E式	深鉢	口縁部	幅約8mmの単沈線を横位に巡らせる	:横方向のミガキ :横方向のミガキ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ1mmの長石を中量含む 焼成普通	
第4図-2	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部	幅約9mmの幅広の単沈線を曲線状に引く	:横方向のミガキ :横方向のミガキ	:褐色 :褐色	φ1mmの長石を多量に含む 焼成普通	
第4図-3	中期後葉 加曾利E式	深鉢	口縁部	隆線を横位に貼付、単節縄文LRを横方向に施文→隆線脇に幅約1cmの幅広の単沈線を沿わせる	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:橙色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石・角閃石を少量含む 焼成普通	
第4図-4	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	胴部	微隆起線を曲線的に貼付→微隆起線脇に幅約5mmの単沈線を沿わせる→単節縄文LRを縦位に施文	:不明 :横方向のミガキ	:黒褐色 :黒褐色	φ1.5mmの長石、φ1mm以下の黒雲母を中量含む 焼成普通	
第4図-5	後期前葉	深鉢	口縁部	無節縄文Lを口唇では横位に、口唇下では縦位に施文、口唇内面に幅約3mmの単沈線を巡らせる	:不明 :横方向のケズリ後、 横方向のミガキ	:黒褐色 :褐色	φ1mmの長石・角閃石・黒雲母を少量含む 焼成普通	
第4図-6	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部	熱糸Lを縦位に施文、胴部との境に隆線を横位に巡らせる→隆線脇に幅約6mmの単沈線を沿わせる	:横方向のミガキ :横方向のミガキ	:黄灰色 :にぶい黄褐色	φ1mmの長石・角閃石を少量含む 焼成良好	
第4図-7	後期前葉 堀之内1式	深鉢	胴部	単節縄文RLを縦位に施文→幅約2mmの単沈線を垂下させる	:不明 :縦方向のミガキ	:黒色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石を多量に含む 焼成良好	
第4図-8	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部	幅約8mmの半裁竹管状工具の腹面による縦位～斜位の集合沈線文	:不明 :丁寧な指ナデ	:褐色 :にぶい褐色	φ1mm以下の長石を微量含む 焼成普通	
第4図-9	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文RLを縦位に施文→幅約6mmの2本一単位の単沈線による懸垂文→沈線間の縄文を磨消	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:褐色 :褐色	φ1mm以下の長石を少量含む 焼成普通	
第4図-10	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文LRを縦位に施文→幅約5mmの2本一単位の単沈線による懸垂文→沈線間の縄文を磨消	:丁寧な指ナデ :不定方向のミガキ	:黒褐色 :褐色	φ1mm以下の長石を中量含む 焼成良好	
第4図-11	後期初頭 称名寺式	深鉢	胴部	幅約5mmの単沈線を曲線的に引く→単節縄文LRを不定方向に施文	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石・石英を中量含む 焼成普通	
第4図-12	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	断面三角形の微隆起線を縦位に貼付→単位不明の条線を斜位に施文	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:黒褐色 :黒褐色	φ1.5mmの長石を多量に含む 焼成普通	
第5図-1	後期後葉 安行1式	深鉢	完形	[口縁部]:粘土紐の貼付け・削り出し(右から左)による隆帯→隆帯の上下縁に横位沈線→隆帯上に単節縄文RLを横位に施文→6単位の瘤状貼付文(縦位のつまみ)・穿孔(外面から) [胴上部]:タスキ状弧線文(9単位)→沈線間に単節縄文RLを横位・斜位に充填→磨消 [胴下部～底部]:横位沈線→沈線以下から外面縁部まで単節縄文RLを横位に施文	:ケズリ・丁寧な指ナデ :横方向のミガキ	:黒褐色 :オリブ黒色	φ1mm以下の白色粒子を多量含む 焼成良好	口縁部に雛状工具による補修孔(外面から) ・口縁部付近に1対の焼成前穿孔 ・外面黒斑有り ・底面付近がやや潰れ気味に肥厚
第5図-2	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部 ～胴部	[口縁部]:粘土紐の貼付け・削り出しによる隆帯→隆帯の上下縁に横位沈線→隆帯上に単節縄文RLを横位に施文→瘤状貼付文(縦位のつまみ)・穿孔(内面から) [胴上部]:タスキ状弧線文→沈線間に単節縄文RLを横位・斜位に充填→磨消 [胴下部]:横位の平行沈線→幅2mm程度の斜線を沈線間に充填	:ケズリ・丁寧な指ナデ :横方向のミガキ	:黒褐色 :黒色	φ1mm程度赤色粒子を微量含む φ1mm以下の白色粒子を微量含む φ1mm以下の雲母片を極微量含む 焼成良好	口縁部付近に1対の焼成前穿孔
第5図-3	後期後葉	深鉢	胴部	幅1～2mmの弧状条線→横位の平行沈線・粘土紐貼付けによる隆帯→隆帯上に単節縄文RLを横位に施文→縦位の平行沈線→平行沈線間に磨消	:不明 :斜め方向の指ナデ	:黒褐色 :黒色	φ1mm程度赤褐色粒子を微量含む φ1mm以下の白色粒子を多量含む 焼成良好	外面炭化物付着
第5図-4	後期後葉 安行1式	深鉢	半完形	[口縁部]:削り出しによる隆帯→隆帯の下縁に押し引き状列点文(左から右)・上下縁に横位の沈線→隆帯上に単節縄文RLを横位に施文 [胴上部]:タスキ状弧線文→沈線間に単節縄文RLを横位・斜位に充填→磨消 [括れ部]:横位の平行沈線→沈線間に押し引き状列点文を充填(左から右) [胴下部]:弧状沈線→沈線間に単節縄文RLを横位・斜位に充填→磨消 [底部付近]:横位沈線→沈線以下に沈線間に単節縄文RLを横位・斜位に施文	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:にぶい赤褐色 :暗赤褐色	φ1mm程度赤褐色粒子を微量含む φ1mm以下の白色粒子をやや多量含む 焼成良好	・歪み強い
第5図-5	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部 ～胴部	[口縁部～頸部]幅5mm程度の弧状条線を横位に施文→口唇部・頸部下端に粘土紐貼付け→粘土紐上に指頭押圧(左から右) [胴部]:幅5mm程度の弧状条線を斜位に施文	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:黒褐色 :暗灰黄色	φ1mm程度の白色粒子を中量含む φ1mm以下の雲母片を中量含む φ1～2mmの赤色粒子を少量含む 焼成良好	
第5図-6	後期後葉	深鉢	胴下部 ～底部	幅2mm程度の条線を縦位に施文	:丁寧な指ナデ :斜方向の指ナデ	:褐色 :黒色	φ1mm程度の赤色粒子少量含む φ1mm以下の白色粒子少量含む φ1mm以下の雲母片を少量含む 焼成良好	・外面炭化物付着
第6図-1	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	粘土紐貼付による山形の波状口縁部作出→口縁部に沿って断面扁平な粘土紐貼付→口縁部および粘土紐上に単節縄文RL→帯縄文間にミガキ調整を施し幅約2mmの沈線を数条引く→波頂部下に三連の瘤状突起を縦位に貼付	:不明 :斜～横方向のミガキ	:黒色 :黒色	φ1mm以下の長石・黒雲母を微量含む 焼成良好	
第6図-2	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	粘土紐貼付による肥厚した口唇作出→口縁部下に断面扁平な隆帯作出→口縁部及び隆帯上に単節縄文RL→帯縄文間をミガキによる磨消→口縁部下及び隆帯脇に幅約1mmの沈線を沿わせる→縦長の粘土紐を貼付瘤状突起を作出	:不明 :横方向のミガキ	:黒色 :黒色	φ1mm以下の長石を微量含む 焼成良好	

第2表 P797出土土器 観察表(2)

第6図-3	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	粘土紐貼付による肥厚した口唇作出→口縁部下に断面扁平な粘土紐を貼付→口唇部及び粘土紐上に単節縄文RL→帯縄文間をミガキによる磨消→口縁部下及び粘土紐脇に幅約1.5mmの沈線を沿わせる	：横方向のミガキ ：丁寧な指ナデ	：黒褐色 ：黒褐色	φ1mm以下の長石を少量、石英を微量含む 焼成良好	
第6図-4	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	粘土紐貼付による肥厚した口唇作出→口縁部下にケズリだしによる隆帯作出→口縁部下及び隆帯脇に幅約1mmの沈線を沿わせる→口縁部及び隆帯上に単節縄文RL→隆帯上に二段の瘤状突起を貼付	：不明 ：横方向のミガキ	：明赤褐色 ：暗赤褐色	φ1mm以下の長石・石英を少量含む 焼成普通	
第6図-5	後期後葉	深鉢	口縁部	断面扁平な隆帯及び円形の瘤状突起作出→隆帯上に単節縄文RL→隆帯間を磨消→隆帯脇に幅約0.5mmの沈線を沿わせる	：不明 ：横方向のミガキ	：灰黄褐色 ：にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石・石英を中量含む 焼成普通	
第6図-6	後期後葉 安行1式	深鉢	胴部	胴上半と下半の境に幅約2mmの単沈線を横位に巡らせる、胴上半に向幅の単沈線で曲線状のモチーフを描く→単節縄文RLを横位に施文、胴下半に角頭状工具による連続刺突文を巡らせる	：横方向のミガキ ：横方向のミガキ	：暗赤褐色 ：暗赤褐色	φ1mm以下の長石を少量含む	
第6図-7	後期後葉 安行1式	台付鉢	台部	断面半円形の隆帯貼付→隆帯上に単節縄文RL→隆帯脇に幅約1mmの沈線を沿わせる→隆帯間磨消→径約12mmの穿孔を数箇施す	：不明 ：横方向のミガキ	：褐灰色 ：黒褐色	φ1mm以下の長石・赤色粒子を微量含む 焼成良好	
第6図-8	後期中葉	深鉢	口縁部	単節縄文RLを口唇では横位に、口唇下では縦位に施文	：横方向のミガキ ：横方向のミガキ	：暗褐色 ：褐色	φ1mmの長石・赤色粒子を中量含む 焼成良好	
第6図-9	後期後葉 安行1式	深鉢	胴部	胴上半と下半の境に幅約2mmの単沈線を横位に巡らせる、胴上半に向幅の単沈線で曲線状のモチーフを描く→単節縄文RLを横位に施文、胴下半に角頭状工具による連続刺突文を巡らせる	：横方向のミガキ ：横方向のミガキ	：暗赤褐色 ：黒褐色	φ1mm以下の長石・石英を微量含む 焼成良好	
第6図-10	後期後葉 安行1式	深鉢	胴部	胴上半と下半の境に幅約1.5mmの単沈線を横位に2条巡らせる。胴上半に向幅の単沈線で曲線状のモチーフを描く→2条沈線間に角頭状工具による連続刺突文を横位に2条巡らせる、単節縄文RLを横位に施文	：横方向のミガキ ：横方向のミガキ	：灰褐色から黒色 ：褐色	φ1mm以下の長石・石英・黒雲母を微量含む 焼成良好	
第6図-11	後期前葉	深鉢	口縁部	幅1mm以下で4～5本一単位の櫛歯状工具による沈線を波状に施文	：不定方向のケズリ ：横方向のケズリ	：褐灰色 ：褐灰色	φ1mm以下の長石・角四石・石英を少量含む 焼成良好	
第6図-12	後期中葉 加曾利B式	深鉢	口縁部	頸部に幅約3mmの単沈線を横位に2条巡らせる、口唇内面を横位に削り、後を作出→口縁部に単節縄文を施文→幅2mmの単沈線による斜位の集合沈線文	：不明 ：丁寧な指ナデ	：褐灰色 ：灰黄褐色	φ1mmの長石を少量含む 焼成良好	
第6図-13	後期後葉 安行1式	深鉢	胴部	胴上半と下半の境に幅約2mmの単沈線を横位に巡らせる→単節縄文RLを横位に施文	：横方向のミガキ ：横方向のミガキ	：暗赤褐色 ：にぶい赤褐色	φ1mm以下の長石を少量、石英・角四石・赤色粒子を微量含む 焼成良好	
第6図-14	後期後葉 安行1式	深鉢	胴部	幅約2mmの単沈線を胴上半と下半の境に横位に巡らせる、同幅の沈線で胴上半に曲線状のモチーフを描く→単節縄文RLを横位に施文	：横方向のミガキ ：横方向のミガキ	：橙色～黒色 ：黒色	φ1mm以下の長石・石英を少量含む 焼成普通	
第6図-15	後期中葉	深鉢	口縁部	単節縄文LRを縦位に施文→幅約1mmで3本一単位の条線を縦位に施文→幅6mmの磨消帯を作出	：不明 ：縦方向のミガキ	：黒色から褐色 ：黒色	φ1mmの長石を少量、φ2mmの赤色粒子を微量含む 焼成良好	
第6図-16	後期後葉	深鉢	口縁部	口唇に幅広の隆線を横位に貼付→隆帯上に連続した指頭圧痕を巡らせる、幅約3mmの単沈線による横位～斜位の集合沈線文	：不明 ：横方向のミガキ	：にぶい黄褐色 ：にぶい黄褐色	φ1mmの長石・角四石・赤色粒子を中量含む 焼成良好	
第6図-17	後期後葉	深鉢	口縁部	口唇に角頭状工具による連続刺突文を巡らせる、口唇下に3本一単位の斜位の条線文	：不明 ：横方向のミガキ	：にぶい褐色 ：褐色	φ1mmの長石を多量に含む 焼成普通	
第6図-18	後期中葉 加曾利B式	深鉢	口縁部	単節縄文を施文→幅約2mmの単沈線による斜位の集合沈線文、口唇内面に幅広の沈線を巡らせる	：不明 ：横方向のミガキ	：にぶい黄褐色 ：灰黄褐色	φ1mm以下の長石・石英・角四石を少量含む 焼成良好	
第6図-19	後期後葉	深鉢	口縁部	口唇に幅広の隆線を巡らせる→隆帯に連続した指頭圧痕を施す、口唇下は幅約1.5mmの単沈線による斜位の集合沈線文	：不明 ：横方向のミガキ	：極暗褐色 ：黒色	φ1mm以下の長石・石英を微量含む 焼成良好	
第6図-20	後期後葉	深鉢	胴部	単節縄文RLを横位に施文	：不明 ：横方向のミガキ	：にぶい赤褐色 ～黒褐色 ：黒色	φ1mm以下の長石・石英を微量含む 焼成良好	外面に吹きこぼれ状の黒斑あり
第6図-21	後期初頭 称名寺式	深鉢	胴部	幅約3mmの単沈線で曲線状のモチーフを描く→沈線区画内に単節LR縄文を施文	：不定方向のミガキ ：丁寧な指ナデ	：明赤褐色 ：明褐色	φ1mm以下の長石を微量含む 焼成良好	
第6図-22	後期後葉	深鉢	口縁部	幅約3mmの単沈線による斜位の集合沈線文、口唇内面に幅広の沈線を横位に巡らせる	：不明 ：横方向のミガキ	：にぶい黄褐色 ：にぶい黄褐色	φ1mmの長石を少量含む 焼成良好	
第6図-23	後期後葉	深鉢	口縁部～胴部	頸部に幅広の隆線を横位に巡らせる→隆帯に連続した指頭圧痕を施す、口縁部・胴部ともに幅約2mmの単沈線による斜位の集合沈線文	：不明 ：横方向のミガキ	：黒色 ：黒褐色	φ1mm以下の長石・石英を微量含む 焼成良好	
第6図-24	後期後葉	深鉢	胴部	幅約3mmの単沈線による横位の集合沈線文	：不明 ：横方向のミガキ	：にぶい褐色 ：にぶい黄褐色	φ1.5mmの赤色粒子、φ1mm以下の長石・角四石・石英を少量含む 焼成良好	
第6図-25	後期後葉	深鉢	口縁部	口唇に角頭状工具による連続刺突文を巡らせる	：横方向のケズリ ：横方向のミガキ	：黒色 ：灰黄褐色	φ1mm以下の長石・石英・角四石を中量含む 焼成普通	
第6図-26	後期後葉	深鉢	胴部～底部	単節縄文RLを横位に施文	：底部はミガキ ：横～縦方向のミガキ	：黒色 ：黒暗赤褐色～黒色	φ1mm以下の長石を少量、石英・角四石・赤色粒子を微量含む 焼成良好	
第6図-27	後期後葉	深鉢	胴部	単節縄文RLを横位に施文	：不明 ：斜方向のミガキ	：黒暗赤褐色～黒色 ：暗赤褐色～黒褐色	φ1mm以下の長石を少量、石英・角四石・赤色粒子を微量含む 焼成良好	

第3表 P799出土土器 観察表

No.	時期 土器型式	器形	部位	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土 焼成	備考
第8図1	中期後葉	深鉢	胴部	捺糸Lを縦位に施文	:不明 :斜め方向のミガキ	:橙色 :橙色	φ2mmの赤色粒子、φ1mmの長石・角閃石・石英を少量含む 焼成良好	
第8図-2	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	複節縄文LRLを縦位に施文→幅約4mmの単沈線による3本→単位の懸垂文→沈線間の施文を磨消	:不明 :縦方向のミガキ	:明黄褐色 :橙色	φ1mmの長石を少量含む 焼成普通	
第8図-3	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	複節縄文LRLを縦位に施文→幅約5mmの単沈線による3本→単位の懸垂文→沈線間の施文を磨消	:不明 :縦方向のミガキ	:橙色 :にぶい褐色	φ2mmの赤色粒子、φ1mmの長石・角閃石を多量に含む 焼成普通	
第8図-4	後期後葉	深鉢	胴部	幅約1mmの単沈線による斜位の集合沈線文	:不明 :丁寧な指ナデ	:橙色 :黒色	φ1mm以下の長石・石英を微量含む 焼成普通	
第8図-5	後期後葉	深鉢	胴部	幅約5mmの単沈線による斜位の集合沈線文	:不明 :横方向のミガキ	:暗褐色 :にぶい赤褐色	φ1mm以下の長石を少量含む 焼成良好	
第8図-6	後期前葉～ 後期中葉	深鉢	口縁部	単節縄文RLを横位に施文	:口唇ミガキ :横方向のミガキ	:にぶい黄褐色 :橙色	φ1mmの長石を微量含む 焼成良好	
第8図-7	中期後葉	深鉢	口縁部	単節縄文RLを縦位に施文	:不明 :横方向のミガキ	:黒色 :黒色	φ1mmの長石・石英・赤色粒子を少量含む 焼成普通	
第8図-8	後期後葉	深鉢	胴部	幅約2mmの単沈線による縦～斜位の集合沈線文	:不明 :横方向のミガキ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石を少量含む 焼成良好	
第8図-9	後期後葉	深鉢	胴部	幅約4mmの単沈線による斜位の集合沈線文	:不明 :横方向のミガキ	:にぶい黄褐色 :黒色	φ1mmの長石を少量含む 焼成良好	
第8図-10	後期後葉	深鉢	胴部	幅約1mmの単沈線による斜位の集合沈線文	:不明 :横方向のミガキ	:黒色 :黒色	φ1mm以下の長石・石英を微量含む 焼成普通	
第8図-11	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	幅約2mmの単沈線を横位に巡らす→直前段反捺RRを横位に施文→沈線上に連続した刺突文	:横方向のミガキ :横方向のミガキ	:灰黄褐色 :灰黄褐色	φ1mmの長石・角閃石を微量含む 焼成良好	
第8図-12	中期後葉	深鉢	胴部	単節縄文LR（前々段多条）を縦位に施文	:不明 :横方向のミガキ	:橙色 :明褐色	φ1mm以下の長石を少量含む 焼成普通	
第8図-13	中期後葉	深鉢	胴部	単節縄文RLを縦位に施文	:不明 :丁寧な指ナデ	:明褐色 :にぶい褐色	φ2mmの長石・角閃石・黒雲母を多量に含む 焼成良好	
第8図-14	時期不明	不明	不明	断面三角形の微隆起線を貼付 破断面を平滑に調整、円形に仕上げる	:不明 :不明	:黒色 :黒色	φ1mm以下の長石を微量含む 焼成良好	土製円盤

第4表 P810出土土器 観察表(1)

No.	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土 焼成	備考
第9図-1	早期後葉 条痕文系	深鉢	口縁部	表裏とも横方向の条痕	:不明 :不明	:褐色 :褐色	縦線を多量、φ1mm以下の長石を少量含む 焼成普通	
第9図-2	中期後葉 加曾利E2式	深鉢	口縁部 一部	単節縄文RLを横位に施文→口縁部に弧状の隆線の貼付→隆線中央に幅約4mmの単沈線を引く、隆線脇に同幅の単沈線を沿わせる、口縁部下端に幅約3mmの単沈線を巡らせる	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ2mmの長石、φ1mm以下の石英・黒雲母を多量に含む 焼成良好	浅鉢の可能性あり
第9図-3	中期後葉 加曾利E3式	深鉢 (波状)	口縁部	捺糸Lを縦位に施文→幅約7mmの単沈線を口唇に3条巡らせる→上2条の沈線内に連続した楕円形の刺突文を巡らせる	:不明 :上半はミガキ、下半はケズリ	:褐色 :暗褐色	φ1mmの長石・少量、赤色粒子を微量含む 焼成良好	連風文土器か
第9図-4	中期後葉 加曾利E2式	深鉢	口縁部	単節縄文LRを横位に施文→幅約7mmの単沈線を口唇に巡らせる、同幅の単沈線で口縁部に曲線的なモチーフを描く	:横位のミガキ :横位の指ナデ後、 横位のミガキ	:黒色 :暗褐色	φ1mmの長石を少量含む 焼成良好	
第9図-5	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部	縦位の隆線を貼付→口縁折り返し部に幅約4mmの単沈線を巡らせる→同幅の単沈線を縦位に連続して施文	:不明 :丁寧な指ナデ	:橙色 :橙色	φ1mm以下の長石・黒雲母を中量含む 焼成普通	曾利系土器か
第9図-6	中期後葉 加曾利E1式	深鉢	胴部	口唇小突起脇に幅4mmの単沈線で枠状のモチーフを描く	:横位のミガキ :横位のミガキ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石・赤色粒子を多量に含む 焼成良好	
第9図-7	中期後葉 加曾利E式	深鉢	口縁部 か	幅7mmの単沈線を横位に2条巡らせる	:横位のミガキ :横位のミガキ	:黒褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石を少量含む 焼成良好	
第9図-8	中期後葉 加曾利E式	深鉢	胴部	無節縄文Lを縦位に施文→幅約2mmの単沈線による蛇行懸垂文	:不明 :横位のミガキ	:暗褐色 :暗褐色	φ1mm以下の長石・石英を少量含む 焼成普通	
第9図-9	中期後葉 加曾利E式	深鉢	胴部	2段多条縄文LRを縦位に施文→幅約5mmの単沈線による懸垂文	:不明 :丁寧な指ナデ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の長石を多量、黒雲母を少量、φ1mmの赤色粒子をごく微量含む 焼成良好	
第9図-10	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	部位 不明	曲線状の隆線を貼付→捺糸Lを縦位に施文→隆線脇に幅約7mmの単沈線を沿わせる	:隆線上のミガキ :横位のミガキ	:褐色 :褐色	φ1mmの長石を少量含む 焼成良好	
第9図-11	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	複節縄文LRLを縦位に施文、幅約9mmの単沈線を胴部上端に横位に巡らせる→幅約5mmの3本→単位の単沈線による懸垂文→沈線間の縄文を磨消	:指ナデ :斜位のミガキ	:黄褐色～黒色 :黒色	φ1mm以下の長石を多量に含む 焼成普通	

第5表 P810出土土器 観察表(2)

第9図-12	中期後業 加曾利E式	深鉢	胴部	捺糸Lを縦位に施文→幅不明の単沈線を横位に巡らせる	:不明 横位のミガキ	:にぶい黄褐色 :橙色	φ1mm以下の長石を多量に含む 焼成良好	
第9図-13	中期後業 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文RLを縦位に施文→幅約4mmの2本一単位の単沈線による懸垂文→沈線間の縄文を磨消	:不明 :不明	:橙色 :黒褐色	φ1mmの長石を微量含む 焼成普通	摩滅激しい
第9図-14	後期前業	深鉢	口縁部	口縁部に横位の断面三角形の隆線を巡らせる→単節縄文LRを横位に施文	:横位のミガキ :横位のミガキ	:褐色 :黒褐色	φ1mm以下の長石を少量含む 焼成良好	
第9図-15	中期後業 加曾利E3式	深鉢	胴部	複節縄文LRLを縦位に施文→縦位の磨消→幅7mmの縦位沈線	:不明 :丁寧な指ナデ	:明黄褐色 :明黄褐色	φ1mm以下の長石・石英を少量含む 焼成普通	
第9図-16	中期後業 加曾利E式	深鉢	胴部	単節縄文RLを縦位に施文→胴部上端に隆線を横位に貼付	:不明 :指ナデ	:明黄褐色 :明黄褐色	φ1mm以下の長石を多量に含む 焼成普通	
第9図-17	中期後業 加曾利E式	深鉢	胴部	単節縄文RLを縦位に施文→幅約6mmの単沈線による蛇行懸垂文	:不明 :丁寧な指ナデ	:黒色 :暗オリーブ褐色	φ1mmの長石・φ1mm以下の石英を多量に含む 焼成普通	
第9図-18	中期後業 加曾利E3式	深鉢	胴部	幅約5mmの単沈線を横位に巡らせる→先端が尖った棒状工具による連続円形刺突文を横位に巡らせる	:不明 :丁寧な指ナデ	:暗褐色 :にぶい黄褐色	φ1mmの長石を多量に含む 焼成普通	
第9図-19	後期後業 安行1式	深鉢	口縁部	幅2mmの3～4本一単位の単沈線を横位に巡らせる→単節縄文RLを口唇に帯状に巡らせる	:ミガキ :横方向の丁寧な指ナデ	:明褐色 :明褐色	φ1mm以下の長石を中量含む	
第9図-20	後期後業	深鉢	頸部	幅約2mmの2本一単位の単沈線を横位に巡らせる→沈線間に三角形の刺突文を巡らせる	:ケズリ後、横方向のミガキ :横方向のミガキ	:黒褐色 :褐灰色	φ1mm以下の黒雲母を少量、長石を微量に含む 焼成良好	
第9図-21	後期後業 安行2式	深鉢	口縁部	小突起下に縦長の瘤を貼付→脊の両脇に幅約1.5mmの単沈線による棒状文→脊内に3本一単位の同幅の単沈線を横位に施文、瘤上に横位の同幅の単沈線を縦方向に施文→口唇および瘤下に連続した刻み目文	:横方向のミガキ :横方向のミガキ	:黒褐色 :暗褐色	φ1mm以下の長石を少量、黒雲母を微量含む 焼成良好	
第9図-22	後期後業	深鉢	胴部 下半	幅約2mmの単沈線を縦位に連続して施文	:ケズリ後、縦方向のミガキ :丁寧な指ナデ	:にぶい黄褐色 :褐灰色	φ1mmの長石を多量、黒雲母を微量含む 焼成普通	
第9図-23	後期後業 安行2式	深鉢	口縁部 ～頸部	円形の瘤を貼付→棒状に器面に削り微隆起帯を作出→微隆起帯の脇に幅約1.5mmの単沈線を沿わせる→微隆起帯および瘤上に連続した刻み目文	:ケズリ後、横方向のミガキ :横方向のミガキ	:黒褐色 :黒褐色	φ1mm以下の長石・黒雲母を少量含む 焼成良好	
第9図-24	後期後業	深鉢	口縁部	口唇に横位の隆線を巡らせる→隆線上に連続した指頭圧痕を加える、隆線下に幅約2mmの単沈線を斜位に連続して施文	:ケズリ後、横方向のミガキ :横方向のミガキ	:黄灰色 :黄灰色	φ1mm以下の長石を中量含む 焼成良好	
第9図-25	晩期前業	鉢	口縁部	口唇直下および頸部との境に幅約2mmの単沈線を巡らせる、小突起内面に円形刺突文→単節縄文RLを横位に施文	:横方向のミガキ :横方向のミガキ	:褐灰色 :褐灰色	φ1mm以下の長石・黒雲母を少量含む 焼成良好	

第6表 P826出土土器 観察表

No.	時期 土器型式	器形	部位	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土 焼成	備考
第10図-1	後期後業	深鉢	口縁部 ～底部	口唇直下を横方向に削り、段差を作出 外面は胴部上～中位で幅約18mmのヘラ状工具による縦方向(下から上)の削り、線状痕が明瞭に残る、胴部下位は幅約3mm単位の縦方向のミガキ	:左記 :横方向のミガキ	:にぶい黄褐色 ～黒色 :にぶい黄褐色 ～黒色	φ1mmの長石・赤色粒子を中量含む 焼成良好	
第10図-2	中期後業 加曾利E3式	深鉢	口縁部	捺糸Lを縦位に施文、隆線より口縁部区画を作出→隆線脇に幅広の沈線を沿わせる	:隆線上ミガキ :横方向のミガキ	:橙色 :黒色	φ1mmの長石を多量に含む 焼成良好	
第10図-3	中期後業	深鉢	胴部	捺糸Lを縦位に施文→幅約10mmの隆線を横位に巡らす→隆線脇に幅広の沈線を沿わせる	:不明 :不定方向のミガキ	:橙色 :黒色	φ1mmの長石・石英を少量含む 焼成良好	
第10図-4	後期後業	深鉢	胴部	幅約2mmの単沈線を曲線状に描く→単節縄文RLを横位に施文	:横方向のミガキ :横方向のミガキ	:黒褐色 :灰黄褐色	φ1mmの長石を中量含む 焼成良好	
第10図-5	後期後業	深鉢	胴部	幅約2.5mmの単沈線による横位の集合沈線文	:不明 :横方向のミガキ	:黒色 :暗褐色	φ1mmの長石・赤色粒子を微量含む 焼成良好	
第10図-6	後期後業	深鉢	胴部	幅約3mmの単沈線による斜位の集合沈線文	:不明 :横方向のミガキ	:黒褐色 :暗褐色	φ1mm以下の長石を少量含む 焼成良好	
第10図-7	後期後業	深鉢	胴部	単節縄文RLを横位に施文	:不明 :横方向のミガキ	:黒褐色 :褐灰色	φ1mm以下の長石・石英・角閃石を少量含む 焼成良好	

第7表 P808出土土器 観察表

No.	時期 土器型式	器形	部位	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土 焼成	備考
第12図-1	後期後業 ～晩期初頭	深鉢	略定形	[口唇部]:6単位の瘤状貼付文 [口縁部]:横位沈線→沈線以上に単節縄文RLうい、横位に施文 [頸部]:横位の弧状沈線→弧状弧線文・蛇行沈線→単節RL縄文を横位に充填 [胴部]:弧線文→弧線文間に単節縄文RLを横位・斜位に充填 [底部]:横位沈線→沈線以下に単節縄文RLうい、横位・斜位に施文	:丁寧な指ナデ :丁寧な指ナデ	:にぶい赤褐色 :にぶい褐色	φ1mm以下の白色粒子を少量含む 焼成良好	放射性炭素年代測定(外面付着炭化物)・リン・カルシウム分析、微細物分析(土器内土壌)

4. 小結

本次調査を以て、戸ノ内貝塚における発掘調査は一区切りを迎えた。これまでの調査で記録した図面・写真類および出土遺物は、早稲田大学考古学研究室で保管しており、報告書作成のために整理作業を継続中である。調査成果の詳細については報告書の刊行をお待ちいただきたいが、ここでは足かけ8年7次にわたる調査を振り返ることで小結としたい。

2003年度に行った測量調査では、印旛村史編纂委員会の調査によって報告されていた3つの地点貝塚を確認することができた。一方で、もう1地点の貝塚（第4地点）は、畑としての利用のためか当時の位置を確認することはできず、斜面にわずかな痕跡を発見した程度であった。それ以外に、遺跡範囲の北側で地膨れ状の盛り上がり、南側で縄文時代晩期の土器片が集中して分布する地点（土器集中地点）があることを確認した。我々の当初の目的として「縄文時代後・晩期社会の解明」という学術的テーマがあったため、前述の土器集中地点を対象に2004年度から発掘調査を開始した。発掘調査区はのべ198㎡に及び、縄文時代の遺構を中心に、旧石器時代、古墳時代、近代の遺物もわずかながら検出した。特に、縄文時代晩期の住居跡は、いわゆる大型住居に含まれる規模のものであり、印旛沼北岸では珍しい事例である。また、縄文時代後期後葉の大型土坑がかなりの密度で分布していることも明らかとなった。これらの土坑は、底面に掘り込みを有する点、覆土中に炭化物の面的な広がりが見られる点、底面付近に大型の土器片が埋蔵されている点など、ある程度の共通性を有している。このような大型土坑は、印旛沼周辺では当該時期によくみられるが、これほどのまとまりをもって検出された遺跡は少ない。土坑の用途に加え、配置や集落の展開など、今後の研究に大いに貢献する事例となるであろう。

戸ノ内貝塚では、印旛村史編纂委員会の調査でも縄文時代晩期の住居跡が検出されている（古内ほか 1984）。しかし、その調査区は我々の調査区よりも北側に位置しており、大型住居との関連は今後さらなる検討が必要である。一方、後期後葉の大型土坑群は、遺跡範囲の南側に集中しているようであり、時期別の土地利用や、居住区の展開を念頭に検討していく必要がある。

また、第3・6次調査では古墳時代の周溝と考えられる遺構を検出した。土師器が1点と、土製管玉が数点出土しており、これらも同様に、戸ノ内貝塚における土地利用史の変遷を考えるうえで重要な資料といえる。

以上、甚だ簡単ではあるが、小結としてこれまでの調査を概括した。印旛沼周辺では、これまで南岸を中心に縄文時代後・晩期の大規模な遺跡が検出されてきた。戸ノ内貝塚における本発掘調査は、調査面積はさほど広くないものの、当該期の遺構・遺物が良好な状態で検出することができたため、南岸の遺跡との関係などを探る上で重要な成果となるであろう。（中門亮太）

おわりに

今までの情報を総合すると、戸ノ内貝塚では後期の多数の土坑、晩期前半期の大型住居などがあり、集団の定住的な居住を示す証拠が挙がっている。

印旛沼周辺部には吉見台遺跡、井野長割遺跡、八千代遺跡、宮内井戸作遺跡など縄文時代後期を代表する遺跡が立ち並び、戸ノ内集落とはほぼ同時期に各集落が営まれていたことがわかる。勿論、それらは無関係に孤立していたわけではなく、婚姻や社会関係を通じて互いに交流をはかっていたことは間違いない。戸ノ内集落の後期段階の人々も、それらの交流網に加わり、地域社会の一員として貢献していたはずである。当時は広大な印旛沼周辺といっても人口は少なく、構築する社会の規模や複雑さは今日とは比べるべくもない。おそらく対面社会の中で、親族組織、婚姻組織、宗教的組織、年齢集団、交換関係、生業の協労関係などを通じて多重的に連鎖する社会関係を営んでいたであろう。そのような比較的シンプルな社会の中で、戸ノ内集落の集団はどのような過程で生み出されたのか。大規模な集団から分岐派生して、新たな集団として到来し、出発したのであるか。現在までの成果では、後期社会が花開く以前に、中期の集落があったことが予想されている。発掘区でも中期の土器片や土坑が検出されており、後期の文化層の下に中期の文化層が眠っている可能性が高い。しかし、土器型式で見ると中期が加曾利E式終末段階で終わり、遺跡の主体を占める曾谷式、安行1式、同2式までの間には空白の非居住期間が横たわる。この空白期間をどのように捉えるか、遺跡の形成史のうえで、重要な課題である。新たに登場する曾谷式以降の展開が、他所から新たにやってきた集団の開始期にあたるか、対岸に立地する吉見台遺跡や井野長割遺跡、宮内井戸作遺跡などの集落から派生した集団の可能性も否定しがたい。

千葉県下で検出されている大型住居の性格も近年の調査により少しずつ明らかになってきている。それが遺跡単位、つまり集落を単位として機能していたのか、それとも個別の集落を超えて、多くの集落間にまたがって分散する親族集団において機能したのか。従来は集落という単位を基本的な前提として議論を進めた経緯があるが、もとよりそれが正しいことは証明されていない。

これからは、遺物と遺構の整理作業を通じて、また他の遺跡との比較を通じて、それらの問題は解明されるであろう。

(高橋龍三郎)

謝辞

本調査および概報作成にあたり下記の方々より貴重なご協力ならびにご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

井出浩正・小倉和重・佐々木由香・篠原正・蜂屋孝之・森下壽典・古谷涉・安井健一・
下総考古学研究会・印西市教育委員会・印旛郡市文化財センター（敬称略、五十音順）

引用文献

- 古内茂・三浦和信・小宮孟 1984 『石神台貝塚・戸ノ内貝塚』 印旛村史編纂委員会
(財)印旛郡市文化財センター 2003 『宮内井戸作遺跡発掘調査概報』
(財)印旛郡市文化財センター 2007 『印旛の原始・古代—縄文時代編—』
佐倉市教育委員会 2010 『井野長割遺跡—第17次調査報告書・総括報告書—』
高橋龍三郎・川畑隼人・中門亮太・青木弘・大網信良・岩井聖吾・服部智至・平原信崇 2011 「千葉県印西市
(旧印旛郡印旛村)戸ノ内貝塚第6次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第56輯 第4分
冊 早稲田大学大学院文学研究科 45-65頁
高橋龍三郎・中門亮太・大網信良・新海達也 2010 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第5次発掘調査概報」『早稲
田大学大学院文学研究科紀要』第55輯 第4分冊 早稲田大学大学院文学研究科 65-82頁
高橋龍三郎・井出浩正・中門亮太・大網信良・新海達也・根兵皇平・高橋想・齊藤直行 2009 「千葉県印旛郡印
旛村戸ノ内貝塚第4次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第53輯 第4分冊 早稲田大学
大学院文学研究科 109-135頁
高橋龍三郎・菊地有希子・井出浩正・森下壽典・中門亮太・大網信良・新海達也・根兵皇平 2008 「千葉県印旛
郡印旛村戸ノ内貝塚第3次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52輯 第4分冊 早稲田
大学大学院文学研究科 61-85頁
高橋龍三郎・井出浩正・森下壽典・米澤雅美・菅原広史・中門亮太・長屋憲慶 2007 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ
内貝塚第2次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第51輯 第4分冊 早稲田大学大学院文
学研究科 75-95頁
高橋龍三郎・小高敬寛・馬場匡浩・井出浩正・矢澤健・高橋淳・菅原広史2006 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚
第1次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第51輯 第4分冊 早稲田大学大学院文学研究
科 75-95頁
高橋龍三郎・小高敬寛・馬場匡浩・井出浩正・矢澤健・高橋淳・菅原広史2006 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝
塚測量調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第50輯 第4分冊 早稲田大学大学院文学研究科
29-45頁



写真1 第7次発掘調査 調査区全景（南から）



写真2 P797第5図1土器出土状況（東から）



写真3 P797第5図2土器出土状況（東から）



写真4 P797 完掘状況（南東から）



写真5 P799 完掘状況（北東から）



写真6 P826第10図1土器出土状況（東から）



写真7 P799・P810・P826完掘状況（南から）

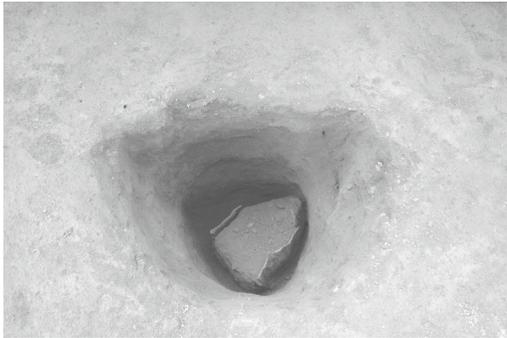


写真8 P808第12図1土器出土状況（東から）



写真9 P808完掘状況（東から）



写真10 発掘調査風景（西から）

[付篇] 戸ノ内貝塚第7次発掘調査の土坑・ ピット採取土壌等の自然科学分析

佐々木由香・米田恭子・竹原弘展・バンダリ スタルシャン・
中村賢太郎・藤根 久・パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

1. はじめに

第7次発掘調査で検出された縄文時代後期後葉～晩期初頭の大型土坑およびピットより採取された土壌を用いて、遺構の用途推定を目的とした自然科学分析を行った。分析は、骨質物の有無を調べるためのリン・カルシウム分析、植物遺体を調べるための微細物分析と植物珪酸体分析を実施したほか、ピット出土埋設土器付着炭化物の放射性炭素年代測定も行った。ここでは分析結果の概要を報告する。

2. 試料と方法

試料と分析項目の詳細は表1のとおりである。基本土層（1, 2層）は、リン・カルシウム分析の比較用に採取された試料である。リン・カルシウム分析は藤根ほか（2008）の方法に従って行った。P797の南土坑1層と中央土坑7層からは骨と見られる白色物が検出されたため、実体顕微鏡下で同定後、白色物を直接測定した。植物珪酸体分析では処理後に植物珪酸体を200個体カウントした。微細物分析は他の分析用の試料を採取した残り全ての土壌を対象に、最小0.5mmの篩を用いて水洗し、種実遺体を同定した。放射性炭素年代測定の方法については、佐々木（2010）を参照されたい。

表1 戸ノ内貝塚第7次調査における自然科学分析項目と点数

遺構名	採取位置	試料番号	分析項目				備考
			リン・カルシウム分析	微細物分析	植物珪酸体分析	放射性炭素年代測定	
P797	覆土	W5層	○				
		W6層	○				
		W7層	○				
		W8層	○				
		W9層	○				
		W14層	○		○		
		土器直下	○				W8層直上
埋設土器	土器内	○	○	○		No.294	
南土坑	1層	1層	○	○			
		2層	○	○			
		3層	○	○			
		4層	○	○			
中央土坑	5層	5層	○	○			
		6層	○	○			
		7層	○	○			
P808	埋設土器	土器内	○	○		○	No.4
基本土層	調査区西壁	1層	○				
		2層	○				
分析点数			18	9	2	1	

3. 結果および考察

[P797] 骨と見られる白色物の実体顕微鏡観察の結果、南土坑の1層からは魚類の歯と椎骨、中央土坑の7層からは哺乳類の可能性の高い骨が同定された。リン・カルシウム分析の結果、これら骨自体のリン含有量は約45～47%であった。一方、埋設土器内の土壌のリン含有量は約31～39%、埋設土器以外の土坑覆土は約2～43%、底部ピットにあたる南土坑と中央土坑の覆土の土壌は約3～45%を示し、特に土器内および周辺と底面にあたるW14層、底部ピット内のリンの輝度が高かった。これに対し、基本土層の土壌のリン含有量は約1～20%であったが、リンの輝度が高い箇所は限定的であった。以上の点から、P797の底部ピットである南土坑および中央土坑は骨質物を含む廃棄物を廃棄した土坑か、または骨質物などの廃棄物を含んだ土壌が流れ込んだ土坑である可能性、埋設土器内外には骨質物が入れられてた可能性が考えられた。

植物珪酸体分析の結果、P797の埋設土器内底部付近とW14層の植物珪酸体の検出個数は、全検出個数の約半分がネザサ節型、約1/4がクマザサ属型で、両試料ともササ類が多く含まれていた（表2）。一方、微細物分析の結果、土器内の土壌からオニグルミの炭化核の破片がわずかに得られたが、土器は完形ではなく密閉性も低いことから、土器内で得られた植物珪酸体や炭化種実は、本来の内容物ではなく土坑覆土の混入と考えられた。リン・カルシウム分析でも、土器内の土壌は、土器が出土したW6層の結果に近く、土器の内外で分析値に有意な差はみられなかった。

W14層から得られた植物珪酸体は、土坑周辺から流れ込んだ可能性も考えられる。しかし、W14層はP797の底面直上層であり、縄文時代の土坑の底部にササ類が敷かれた例もあるため、ネザサ節型を中心としたササ類の葉が除湿等の目的で土坑底部に敷かれた可能性もある。また、ササ類が竪穴住居跡の屋根材と推定された例もあり、P797には上屋の存在を想起させる

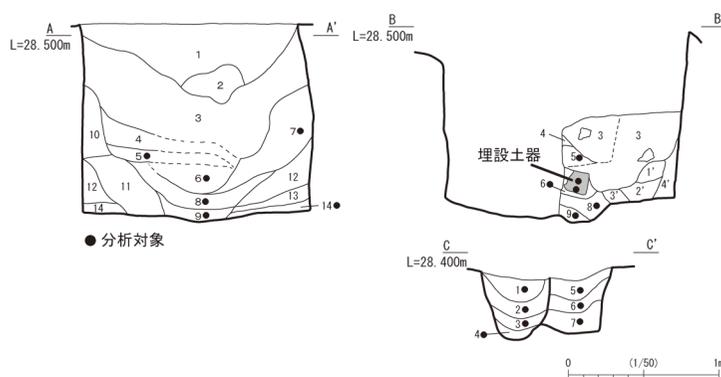


図1 P797の断面図および分析試料採取位置

表2 P797から検出された植物珪酸体個数（計200個体カウント）

遺構	採取位置	機動細胞珪酸体						不明植物珪酸体	
		ネザサ節型	クマザサ属型	他のタケ亜科	シバ属	キビ族	ウシクサ族	棒状型	ポイント型
P797	土器 No.294 内底部付近	119	51	2	1	1	5	19	2
	W14層	125	58	-	-	2	3	11	1

表3 遺構内出土の炭化種実（括弧は破片を示す）

分類群	遺構名 採取位置 層位 部位 / 重量 (cc)	P797							P808	
		南土坑				中央土坑			土器	土器
		1	2	3	4	5	6	7	No.294 内	No.4 内
オニグルミ	炭化核	(18)	(8)	(7)		(20)	(8)	(8)	(2)	(23)
キハダ	炭化種子						(1)			(1)
トチノキ	炭化種子					(1)				
同定不能	炭化種実	(4)	(32)	(6)	(9)	(7)	(23)	(5)	(8)	(20)

小ピットも付随するため、上屋根があったとすればササ類が利用されていた可能性も考えられる。

微細物分析の結果、南土坑からオニグルミの炭化核破片、中央土坑からオニグルミの炭化核破片とトチノキの炭化種子破片、キハダの炭化種子破片が少量得られた（表3）。3種類とも食用可能であるが、オニグルミやトチノキは食用にならない部位の出土で炭化もしていることから、加工時や利用後の残滓が燃やされ土坑内に廃棄されたか、周辺で加工・燃やされた種実を含んだ土壌が土坑内に流れ込んだ可能性、あるいは埋め戻した土壌に偶然炭化種実が含まれていた可能性などが考えられる。また、土坑の覆土は調査所見において人為的な埋め戻しの可能性も想定されており、埋設土器が出土していることから、種実が意図的に遺構内に入れられた可能性も考えられる。

[P808] 埋設土器の外周下半部付着炭化物の年代は、 2σ （95.4%の確率）の暦年代で1382-1334 cal BC（16.6%）、1324-1194 cal BC（77.6%）、1141-1133 cal BC（1.2%）であった。小林謙一（2008）の各土器型式の年代値と比較すると、試料の年代は後期末葉の後期安行式期（1450-1270 cal BC頃）から晩期初頭の大洞B1式期（1270-1170 cal BC頃）を中心とする範囲に相当し、埋設土器の考古学的な年代観と整合的であった。

土器内の土壌からはオニグルミの炭化核破片とキハダの炭化種子破片がわずかに得られた。埋設土器の土壌のリン含有量は約2～20%で、リン含有量の高い箇所が検出され、骨・歯が含まれていた可能性が高い。ただし、埋設土器内に骨が埋蔵されていたかどうかは、P808の覆土と比較し判断する必要がある。

引用文献

- 藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析。日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，108-109
- 小林謙一（2008）縄文時代の暦年代。小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「歴史のものさし 縄文時代の考古学2」：257-269，同成社。
- 佐々木由香（2010）戸ノ内貝塚第6次調査出土炭化材の年代測定結果について。高橋龍三郎他編「千葉県印西市（旧印旛郡印旛村）戸ノ内貝塚第6次発掘調査概報」：64-65，早稲田大学大学院文学研究科紀要 第56輯